

れきはく

No. **140** 2022.9.16

令和4年度 アイヌ工芸品展 石川県立歴史博物館 秋季特別展

アトゥイ

海と奏でるアイヌ文化

 $9/23 \xrightarrow{\oplus} 11/13$

令和4年度アイヌ工芸品展 石川県立歴史博物館 秋季特別展 海と奏でる

9/23

10/19(水)は展示替えのため休室



9:00-17:00

※9月23日(金・祝)は開幕式のため ・般入場は10:00から



アイヌ民族をとりまく壮大な海の世界 ― 海にまつわる 豊富な民具資料からアイヌ文化をみつめる本県初の展覧会

「アトゥイ」はアイヌ語で「海」を意味します。アイヌ民族は、その主な居住地である北海道・樺太 (サハリン)・千島列島 を広大な海に囲まれ、海獣のほか魚類・海藻類など豊かな海の恵みにあずかってきました。危険を伴う海での生業にあたっては 神々への祈りを欠かさず、大切に扱われた祭具や道具類が現在まで伝えられています。

また、アイヌ民族にとって海は外の世界とつながる道でもあり、大陸や本州との交流をもとに豊かな文化を発展させてきました。 和人*が「北前船交易」と呼ぶ江戸後期から明治にかけての本州と北海道との商品流通は、アイヌ民族の資源や労働力を組み込 んで成立しました。北海道と北陸でやり取りされた海産物や工芸品の数々は、海を介した接触と交渉の歴史を伝えてくれます。 本展では、豊富な民具資料を主軸にアイヌ民族と海の密接な関わりについて紹介します。 *日本の民族的マジョリティ

海に生きる

海辺に暮らすアイヌ民族は、大海原に舟を 漕ぎ出し、海の恵みを得てきました。その 対象は、小さな魚・貝・海藻から、クジラ・ トド・アザラシ・オットセイなどの海獣、 メカジキ・マンボウなどの大型魚にまでお よびます。「海に生きる」ではアイヌ民族の 海での生業活動について紹介します。

▶海の恵み

アイヌ民族は、海からの恵みを余すこ となく生活の様々な場面で利用してき ました。その用途は、食料はもちろん、 生活道具から子供のおもちゃの素材ま で多岐にわたります。「海の恵み」では アイヌ民族の魚類、貝類、海獣などの 利用について紐解きます。

脚海に祈る

アイヌ民族の在来的な世界観では、この 世の全てのものに魂が宿っており、それ らの恵みによって生かされることに感謝 の祈りをささげます。その精神文化は、 暮らしの基盤となる周囲の自然と密接 な関係にあります。「海に祈る」ではア イヌ民族の海の信仰に焦点を当てます。

▲海漁に向かう 木下清蔵(1901-1988)撮影 【国立アイヌ民族博物館蔵】

→ イクパスイ【市立函館博物館蔵 重要有形民俗文化財】

木製の祭祀具。儀礼の際に神酒を入れた椀とあわせて用い、



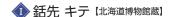
▲ カメ神の頭骨 エチンケカムイ

守護神として祭られたウミガメの頭骨。 イナウ (木製の祭祀具) の削りかけが残る。



🕕 貝下駄 セイピラッカ (国立アイヌ民族博物館蔵)

ウバガイ (ホッキガイ) で作る遊具。 両足の親指と人差し指の間に縄を挟んで貝殻に乗り、 歩いて遊ぶ。



海獣や大型魚の捕獲に使った銛先。 鯨骨やメカジキの鼻先、シカ角、固い木などに金属板を挟んで固定する。



アイヌ文化

【観覧料】一般/1,000(800)円 大学生·専門学校生/800(640)円)内は20名以上の団体料金/65歳以上は団体料金 高校生以下無料 *常設展もあわせてご覧いただけます *障害者手帳または「ミライローD」ご提示の方および付添1名は無料 *電子チケットは当館ホームページよりご購入いただけます(日時指定なし)

【主催】石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館・公益財団法人アイヌ民族文化財団 【後援】国土交通省・北海道教育委員会・公益社団法人北海道アイヌ協会・北國新聞社



海は、外の世界とつながる道でもあり、そこには相互の 接触と交渉の歴史があります。いわゆる「北前船交易」 の背景にも、アイヌ民族の資源や労働がありました。「海 でつながる」では、おもに北陸地方とアイヌ民族の関わ りについて紹介します。



🖚 杯・天目台

【苫小牧市美術博物館蔵】

アイヌ民族の祭祀具で、天目台に 漆椀をのせて使用する。漆器は 和人との交易などで入手したもので、 その中には輪島塗や山中塗も含まれる。



もっと知ろう! アイヌ文化 展示 9/27(火)~11/13(日)

アイヌ伝統舞踊 「白糠のフンペリムセ (クジラの踊り)」と紙芝居 10/1(土)14:00-

> 出演:白糠アイヌ文化保存会 会場はいずれも石川県立図書館

関連イベント

事前申込が必要なものは下記の方法でお申込ください

【申込方法】当館ホームページのイベント参加申込フォーム または 往復はがき

【記載内容】 ●希望イベント名(希望回) ●お名前 ●ご住所 ●電話番号 ●人数(●人数 (1通2名まで)

※応募者多数の場合は抽選となります *全員のお名前をご記入ください

記念講演会

「アイヌ文化がつなぐ世界 ― 過去・現在・未来 ― 」

申込不要(当日先着順・定員40名)・聴講無料

日時:10月2日(日) 13:30~15:00

講師:本田 優子氏(札幌大学教授) 会場:ワークショップルーム

石川の歴史遺産セミナー(リレー講義) 「はじめてふれるアイヌ文化」

要事前申込(定員各回40名)・申込締切11月1日(火)必着・聴講無料

日 時:11月13日(日) 10:30~12:00/13:30~15:00 演題①:「アイヌの海神信仰と神話」10:30~12:00

講師:北原 モコットゥナシ氏

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授) 演題②:「アイヌ工芸の過去・現在・未来」 13:30~15:00

師:山崎 幸治 氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授)

会 場:ワークショップルーム

特別展関連れきはくゼミナール 「北陸とアイヌの文化交渉」

申込不要(当日先着順・定員40名)・聴講無料

日時:10月15日(土) 13:30~15:00

講師: 吉田 朋生(当館学芸員) 会場:ワークショップルーム

展示解説

申込不要(当日先着順・定員20名)・当日の特別展チケットが必要

日時: 9月23日(金・祝) 13:30~14:30

解説:山崎 幸治 氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授)/

当館学芸員 場所:特別展会場

アイヌ伝統舞踊公演「白糠のフンペリムセ」

申込不要・無料

日時:10月1日(土)11:00開演

出演:白糠アイヌ文化保存会 場所:歴史博物館建物周辺 (雨天の場合は館内)



ワークショップ「アザラシじょうずに獲れるかな?」

申込不要・参加無料

樺太アイヌがアザラシを捕獲するときに 使った銛(模型)でアザラシ猟を体験

日時:9月24日(土) 13:30~14:30 会場:第2棟1階ウェルカムラウンジ 制限時間内に できた人には 記念品を プレゼント

工芸ワークショップ

「アイヌ刺繍でオリジナルTシャツづくり」

要事前申込(定員各回10名)・申込締切10月14日(金)必着・参加無料

日時:10月29日(土) 1回目10:00~12:00/2回目14:00~16:00 講師:宇佐 照代氏・宇佐 智美氏

*Tシャツは各自でご用意 会場:ワークショップルーム





北陸に伝わるアイヌ民族の衣服

→ 学芸主査 大井 理恵

秋季特別展「アトゥイー海と奏でるアイヌ文化」は、「海」をテーマに、アイヌ民族と海の関わりについて、豊富な民具資料から紹介する展覧会である。海獣・大型魚を捕獲する銛や、海産物を利用した生活用具の数々から、海の恵みによる豊かな物質文化を知ることができる。また、アイヌ民族が祭具として使用した本州産の漆器や、和人*の需要にこたえて製作した工芸品などは、海を介した物資と文化のやり取りを伝えてくれる。ここでは北陸に伝わるアイヌ民族の衣服を紹介したい。

アイヌ民族の衣服は、動物の皮や羽毛を使ったものが古く、草木の靭皮繊維を織ったものや、交易で得た絹や木綿がのちに加わったと考えられている。このうちオヒョウやシナノキの樹皮繊維を素材とした「アットゥシ」、イラクサ科植物の繊維を受けて変色した「アットゥシ」、イラクサ科植物の繊維を受けて変色したとされる。例えば形は、もじりを達し、定着したとされる。例えば形は、もじりを発達し、定着したとされる。例えば形は、もじりたで、で変色に対したとされる。のがなく、単仕立てで、下衣を用いない一般には、単仕立てで、下衣を用いない一般には、対象いが、これは本州の仕事着、特に漁労関係によくみられ、和人とでは、端に切伏(アップリケ)や刺ば背中や衿、袖、裾に切伏(アップリケ)や刺ばず中やおい、本州からの木綿の流通が盛んとなった近世中期以降の傾向であろう。

これらは生活に密着した衣服であったが、和人の北方進出に伴い産物化し、特にアットゥシは18世紀後半以降、漁場で労働するアイヌ民族や和人の着かのでで、でであるかの数が流通した。和人向けの「蝦夷土産」の一つとして本州にも渡ったが、仕事着に転用されることも多く、特に北前船の船乗りが愛用した。水に強い特性ゆえとされるが、船絵馬においても船乗りの服装をアットゥシとして表現しており、北前船船員の象徴のように捉えられていたことが分かる。加賀市北前船の里資料館所蔵の2領は、いずれも後補の紐や袖口の改変があり、実際に船上で使用されたことがうかがえる。平袖(広袖)のアットゥシは和人向けに作られたもので、船頭が好んだという(写真1)。

テタラペは樺太アイヌが多用し、着心地の良さから和人にも珍重された。本館蔵の2領は黒島村(輪島市門前町黒島町)の廻船問屋角海家の船頭をつとめた北潟家に伝わったもので、明治中期頃に北潟治作氏が持ち帰ったとする。当時、角海家の持船は樺太(サハリン)に渡って商売をしており、そこで入手

したのだろう。経糸に木綿糸を加えて縞模様に織り 上げ、紺木綿の切伏の上から刺繍を施す。

もう1領、木綿衣が出品されるが、これは新潟県 糸魚川市出身の文学者・相馬御風が郷土史研究に尽 力する中で昭和初期頃に収集したものである。衽の ある和服仕立てだが、見事な切伏と刺繍(写真2) はアイヌの手によるものと見てよい。裏地が擦り切 れているものの切伏・刺繍部分に傷みはなく、作り 手の技能の高さが知られると同時に、持ち主が大切 に着用したことがうかがえる。

これらの衣服は、アイヌ民族の美意識や技能とともに、和人の衣服文化を取り入れて発展させた柔軟な感性を伝えてくれる。美しさと機能性を備え、和人にも愛好されたが、産物として出回った背景として、和人の進出によってアイヌ社会が変質を余儀なくされた現実があったことも忘れてはならないだろう。

*日本の民族的マジョリティ



【写真1】衣服(樹皮繊維)アットゥシ 加賀市北前船の里資料館蔵



【写真2】衣服(木綿) 糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)蔵

広報誌『石川れきはく』 発行業務に携わって

学芸員 コラム Column

学芸主任 中村 賢一

4月にこの石川県立歴史博物館へと赴任して、 5ヶ月弱が過ぎました。私が昨年度までの11年間過 ごしてきた教員としての生活とは異なる点も多く、 未だ五里霧中といった状況の毎日を過ごしています。

今、皆さんが読んでおられる『石川れきはく』の発行は、本館普及課の業務の一つであり、今年度は私が担当しています。本格的な印刷物の発行に関わるのは人生で初めての経験であり、『石川れきはく』が完成していく過程で、入稿・校正・校了といった言葉の意味から発行への流れに至るまで、様々のことを知ることができました。私の不手際があれやこれやとある中でも、4月に138号、6月に139号を無事に発行することができたのは、前任者、執筆担当者、印刷会社といった多くの皆さんのご協力あってのものです。

僅か数ヶ月ではあるものの学芸員として、様々の 博物館業務に関わる中で、これまでの自らの仕事の 方法などについて、改めて考えさせられる場面が多 かったため、本誌のコラムを担当することとなった この機会に、そうしたことを一回整理して、まとめ てみることにしました。

今年は『石川れきはく』の発行など、これまでの 経験にない仕事が多く、具体的に何をするのかとい うことから、その方法をとる意味や理由などまで一 から教えてもらって、仕事にあたるということがほ とんどです。昨年度はそれまでの経験を根拠として 日々の仕事にあたっており、一つ一つの取り組みの 意味や理由について深く考えたり、周囲に確認した りといったことはあまり多くありませんでした。改 めて今年、昨年度の自分の仕事を見返してみると、 経験によって物事にあたる際の選択肢を限定し、問 題を解決するまでの速度の向上や負担の軽減などに はつなげてはいたものの、その一方でバイアスによ る目の前の事象の読み損ねなど経験に拠りすぎるこ とによる問題点も少なくなかったように思います。

そうした反省から今年は過程を可視化しておくことが必要であると考え、仕事内容をブロック分けして内容や時系列ごとに並べなおすなど、次回以降同

様の仕事に取り組む際に、記憶や感覚でなく記録から事を始めることや、作業全体を通した視点からの修正に生かすことを意識した形で、行った担当業務を図にまとめています。初心故の迷いも選択の多様性として図の流れに残し、その選択に経験を状況判断の材料として生かしつつも、経験により主観を固定化させないよう、それぞれの図を今後の状況に応じて更新しやすい形にまとめるよう心掛けています。『石川れきはく』の作成の過程についても、その一連の流れを文章ではなくチャートでまとめており、今後の発行において、この図の活用や更新を重ね、よりよい紙面作りを目指してまいります。

最後となりますが、本館が開館した1986(昭和61)年10月25日に創刊された『石川れきはく』は、年間4回を目安として発行されており、今号で140号となります。まだ発行に関わって3回に過ぎない私から申し上げるのは大変恐縮ではありますが、今後とも本誌をよろしくお願いいたします。さらに、展覧会の開催に臨む学芸員や、よりよい誌面を模索する担当者など、発行されたその時々の多くの方々の思いを読み取ることができる過去の『石川れきはく』についても、本館ホームページに掲載してございます。ぜひご一読いただければと思います。





再興九谷における窯道具と重ね積み技術について

学芸員 野村 将之

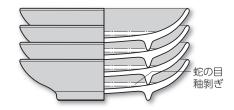
一、はじめに

現在の石川県に相当する加賀・能登では、19世紀に入ると加賀を中心に各地で陶磁器の生産が行われる。 現在では「再興九谷」とも総称されるこれらの窯は明治維新に前後して相次いで廃窯となったが、現在の九谷 焼生産の礎を築いたとして評価されている。

さて、再興九谷にて生産された陶磁器については、これまで伝世した色絵磁器を中心に研究がなされてきた。 しかし、再興九谷の先駆けをなした春日山窯(金沢市)の当初の目的は、加賀藩領内で使用される陶磁器の 国産化であり、これまで発掘調査が行われた窯跡では陶器をはじめとした日常雑器の出土が目立つ。そこで、 ここでは再興九谷における日常雑器の生産について、窯詰め技法に注目して述べていきたい。

二、窯道具とは

陶磁器生産の過程で、本焼の際には窯の中に多くの製品が詰められる。この窯詰めに用いられるのが窯道具であり、その目的は「製品の保護」と「製品の重ね積み」の2種類に大別される。製品の保護については、焼成時に生じる灰などが製品に付着すると、品質が低下する恐れがある。これを防ぐために桶状の窯道具が用いられることがあり、報告書ではこれを「サヤ」と呼称する。また、製品の重ね積みは窯の上部空間を利用して製品を効率よく生産するために行われるが、その際に釉薬(うわぐすり)に



【図1】「蛇の目釉剝ぎ」による重ね積み

よって製品同士が熔着するのを防止するために窯道具が用いられる。再興九谷では「ハリ」とよばれる円錐状の窯道具が主に用いられ、ハリによって重ね積みされた製品には見込(内側の中心部分)に目跡(点状に釉薬が剥がれた跡)が残る。また、器の見込のうち、重ねる器の高台と接する部分の釉薬をリング状に剥ぎ取っておく「蛇の目釉剥ぎ」と呼ばれる技法が用いられることもある(図1)。

この重ね積みの主な技法には、肥前に由来する天秤積みと、瀬戸・美濃、あるいは関西に由来するサヤ積みの2種類がある(図2)。先行研究では吉田屋窯(加賀市)は天秤積み、若杉窯(小松市)は天秤積みと



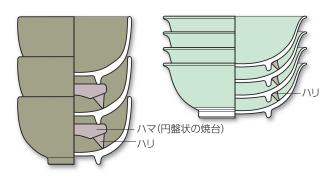
【図2】天秤積み(左)とサヤ積み(右)

サヤ積みの併用、蓮代寺窯(小松市)は サヤ積みであることが示されている。ま た、松山窯については資料調査の結果、 サヤ積みを主に使用していたことが明ら かとなった。このほか、春日山窯ではサ ヤ片が採集されているほか、窯場の絵図 にも「匣拵所」とあることから、サヤ積 みが導入されていたとみられる。



三、再興九谷における重ね積みについて

ここからは天秤積み・サヤ積み以外の重ね積みの 技法について述べるが、まずは八幡若杉窯からみて いく。ここは平成4年(1992)から6年にかけて 発掘調査が行われ、膨大な量の陶磁器・窯道具が出 土している。このうち、日常雑器では、口径が13 ~14cm程度の磁器染付皿に蛇の目釉剥ぎが施され る。また、目跡は陶器を中心に確認でき、碗や鉢、 土鍋、灯明皿に多く残る。具体的なハリの使用法は、 「ハマ」と呼ばれる円盤状の窯道具と組み合わせる 場合と、製品に直接貼り付けて使用する場合の2種 類がある(図3)が、碗と鉢では高台の脇にハリを



【図3】ハマとハリを組み合わせた重ね積み(左)と ハリのみによる重ね積み(右)

貼り付けた痕跡があり、この2器種についてはハマを使わずハリのみで重ね積みをしていた可能性がある。

窯道具の省略・簡略化とも受け取れるこの手法は、嘉永年間(1848-1854)から明治5年(1872)頃まで操業した松山窯でも確認できる。松山窯は、嘉永年間から文久年間(1861-1864)の末までは大聖寺藩によって保護が行われたが、その後は保護が打ち切られ民営に切り替えられたとみられている。このうち、明治年間の物原から出土した鉢類には、蛇の目釉剥ぎや高台脇・見込にハリの跡を残したものが多く見られ、窯道具の使用を簡略化した重ね積みが行われていた可能性が高い。また、碗には目跡のほか、ハマとハリが熔着した資料があり、鉢と碗で重ね積みの技法が使い分けられていたとみられる。

また、弘化4年(1847)に開窯した蓮代寺窯でも、碗もしくは鉢の高台脇にハリが熔着した陶器片に加え、大量のハリが出土している。

ここまで見てきた3か所の窯跡で共通するのは、ハリの多用である。これは代表的な再興九谷である吉田屋窯にはない特徴であり、サヤ積みの技法と共に瀬戸・美濃もしくは関西から導入されたとみられる。八幡若杉窯と松山窯ではハリを製作する際の型が数種類出土しており、出土しているハリの法量もいくつかの規格に分類できる。蓮代寺窯では型は出土していないものの、ハリは3種類ほどの規格に分類でき、形状も類似しているため、蓮代寺窯でも型が導入されていた可能性が高い。こうした型は窯詰めの度に大量に必要となるハリを揃えるために製作されたとみられ、ロクロなどの技術の習熟を要するサヤなどに比べ、技術的に未熟であっても窯道具の製作が容易であるというメリットがある。窯道具には繰り返し使用できるものと一度しか使えないものの2種類があるが、繰り返し使用できるものにはある程度熟練された技術を用いる一方、一度の使用で廃棄となるものには製作が容易な技法が用いられるといったように、使用可能な回数に応じて技術の使い分けがなされていたとみられる。その目的としては窯道具製作に割く労力を削減し、製品の生産にまわすため、またはコストの削減などが考えられよう。

四、おわりに

ここまで、再興九谷における重ね積みを中心とした窯詰め技法に注目して述べてきた。 ここでは主要な窯道具に絞っておおよその傾向を述べたが、より詳細な検討を行いほかの 産地と比較することによって、技術の系譜や変遷が明らかになると思われる。

一方、近年では金沢城下を中心に消費地の資料も増加している。消費地出土の日常 雑器の中には、生産地の特定が難しいものや、再興九谷でも具体的な窯が判別 できないものも多い。また、昭和15年(1940)に松本佐太郎が著した『定本 九谷』では、今日「再興九谷」として広く知られている窯の他に10か所近く の窯の名が確認できる。今後、製品の形状や釉に加え、窯詰め痕も産地特定 の手がかりとなることが期待されるが、同時に生産地である窯跡の調査を 進めることも課題となろう。





展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。

※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

月 休館日:9/20(火)~22(木)

17⊟ れきはくゼミナール

「越と出雲の古代史」 講師:三浦 俊明

23⊟ 「アトゥイ

(土)

(金•祝) -海と奏でるアイヌ文化」

講師:山崎 幸治 氏 (北海道大学アイヌ・先住民 研究センター准教授) / 当館学芸員

「アトゥイ 24⊟ (土) -海と奏でるアイヌ文化」

ワークショップ 「アザラシじょうずに獲れるかな?」

1 ⊟ アイヌ伝統舞踊公演「白糠のフンペリムセ」 (土)

出演: 白糠アイヌ文化保存会

2⊟ 「アトゥイ-海と奏でるアイヌ文化」 記念講演会

(日) 「アイヌ文化がつなぐ世界-過去・現在・未来-」 講師:本田優子氏(札幌大学教授)

15⊟ れきはくゼミナール

(土) 「北陸とアイヌの文化交渉」

講師: 吉田 朋生

29⊟ 「アトゥイー海と奏でるアイヌ文化」 (土) 工芸ワークショッフ

> 「アイヌ刺繍でオリジナルTシャツづくり」 講師:宇佐 照代 氏・宇佐 智美 氏

13⊟ 石川の歴史遺産セミナー(リレー講義) (日) 「はじめてふれるアイヌ文化」

「アイヌの海神信仰と神話」

講師:北原 モコットゥナシ氏 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター

准教授)

「アイヌ工芸の過去・現在・未来」

講師:山崎幸治氏

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター

准教授)

れきはくゼミナール 19⊟

「再興九谷にみる19世紀の産業振興」

講師:野村 将之

れきはくゼミナール

毎月1回~2回、土曜日に実施。 当館学芸員が、独自のテーマを設 定して講義します。



いしかわ歴史講座

11月から1月、金曜日に実施。当館学芸員 が、常設展示の内容を中心にお話しします。

全11回

11月4日(金)・11月11日(金)・11月18日(金)・11月25日(金)

古文書講座

(土)

当館学芸員が、古文書の読み方や 内容を解説します。

要 申 込 随時開催

10月6日(木)・11月10日(木)・12月15日(木)

次回 展覧会の お知らせ

^{企画展} れきはくコレクション2021-2022

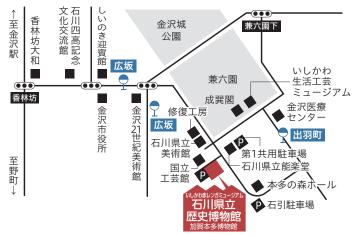
当日先着順

令和4年 $\overline{(2022)12/10}$ (土)~令和 $\overline{5}$ 年 $\overline{(2023)1/9}$ (月·祝)

当館が所蔵する資料は、県内外からのご寄附によるものが大半を占めます。2021 年には、274点が新たに当館の所蔵となりました。加賀前田家初代・利家が豊臣政権 の五大老であった上杉景勝に宛てた書状や、石川県立工業高校の前身にあたる金沢 工業学校の初代校長・納富介次郎が描いた掛軸など、貴重な資料ばかりです。本展 では2021年の新収蔵品に加え、室町時代から500年以上にわたって代々活躍した 「清光」の13代・清一が明治時代に鍛えた短刀をはじめとする、2022年に当館が 収蔵した資料を一堂に公開します。



前田利家書状 越後中納言宛





いしかわ赤レンガミュージアム

石川県立歴史博物館

ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1 TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836 E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp https://ishikawa-rekihaku.jp/



Q.「こな納豆」はプロバイオティクス食品なの? 国内最古のプロバイオティクス!? 生きて腸まで届く、芽胞状の納豆菌

「納豆菌」は枯草菌の一種で、稲の藁に 多く生息しています。納豆菌は増殖に適さ ない環境になったとき、生きるための手段 ない来源になったこと、主きるためが存 として耐久性の高い特殊な設<u>「芽胞(がほう)」</u>をつくります。「<mark>芽胞状の納豆菌</mark>」は熱 や乾燥に強いため、胃酸にも負けることな

く生きて陽まで届くことができます。 「約豆菌」は、善玉菌として働きながら、乳酸菌のエサ(オリゴ糖)をつくったり、乳 フリーズドライで粉末化した「こな納豆」は、納豆の良質なタンパク質や、食物繊維、カルシウム、ビタミンK₂など、納豆の有用成分を余すことなく手軽に摂取できま がらに、生きて腸まで届く「芽胞状の 菌」を、生の納豆よりも数多く効率的 に摂ることができるのです。

■内容量:18g ■賞味期限:未開封で1年 1.080円

佐賀県江北町有機研究会の大豆100%使用

◆ご注文はコチラから 受付時間:9時~17時(休業日を除く)

☎050-1865-3800



《オペレータに必ず「P11」とお伝えください》

●ご注文受付後、3日~7日間前後でポストにお届けします。●お支払方法は、「クレジットカード」、または「後払い(コンビニ・郵便局/手数料200円(税込)」。●送料全国 (コンヒニ・郵便) 律250円(税込)